

タイトル：2022 年度 教育セミナー（第 18 回）

日時：2022 年 9 月 15 日（木）～18 日（日）

ハイブリッド開催

「1 月革命」期のエジプト・ムスリム同胞団における「イスラーム国家論」
～政治動員におけるネイション・マイノリティー・ジェンダーを手がかりに～
高橋 ひとみ（立命館大学大学院 国際関係研究科 博士前期課程 1 年）

9 月 15 日から 9 月 18 日の日程で行われた「中東☆イスラーム教育セミナー」は、「中東・イスラーム地域/世界」の情報や知識を得ると共に、同世代の同じような関心を持つ受講生とのネットワーク構築としての「集う場」として、極めて有益な機会であった。過去 2 年間、本セミナーは新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となっていたが、今年は対面とオンラインのハイブリッド開催という、新しく現代的な形で実施された。本セミナーの感想を、講師の先生方によるレクチャー、受講生発表、そして受講生との交流の 3 つに絞ってまとめる。

まず 1 つ目に、講師の先生方によるレクチャーである。講師の先生方やスタッフの先生方のディシプリンや専門地域が多岐にわたっていたことから、新たな情報や知識を得ることができた。これに加え、先生方がなぜ研究をしているのか、今何を考えてどのようなビジョンを持って研究なさっているのか、研究報告の場では恐らくお話しされないであろう、個人の内面的なお話を伺うことができた。研究者の道を志す私にとって、これらのお話は今後の大学院生活とその後の人生を送るに当たって目標を立てる際の、大きな指針となるだろう。

2 つ目に受講生発表である。自身は 2 日目の朝イチ受講生発表を担当した。まずは、博士前期課程 1 年の未熟で拙い報告に約 1 時間半という時間を割いてくださったことをこの場を借りて改めて感謝を申し上げたい。参加者は広く「中東・イスラーム地域/世界」を研究しているものの、地域やディシプリンが異なっていたため、いかに研究の意義や面白さ、特異性を出すかに重点を置いて報告を行った。その反面、地域や着目主体の基礎情報の提示が疎かになってしまったことが最大の反省点である。この経験から報告内容のバランスを学ぶと共に、いかに観客を引きつけるか検討することが必要である。質疑応答の時間では先生方や受講生から答えきれないほどの質問をいただいた。この経験は単に研究を見直すことのみならず、質問にどう答えるか質疑応答の練習をする機会にもなった。

3 つ目に受講生との交流である。新型コロナウイルスの影響で約 2 年間は研究会やシンポジウムその他セミナーなどが全てオンライン開催となっていた。加えて、普段私が置かれて

いる環境は「中東・イスラーム」を研究している院生がほとんどおらず、同世代の院生や研究者を目指す方々とのネットワークがほぼゼロに近かった。しかしこのセミナーに全日対面で参加したことで、セミナー内の休み時間やセミナー後の時間でぎくばらんに会話することができ、コミュニティーを形成することができた。会話からたくさんの刺激を受け、今後もより研究に邁進する着火剤となった。

総じて、本セミナーに参加し極めて有意義な 4 日間を過ごすことができた。先生方や受講生からいただいたコメントや質問、受講生発表の内容から得た情報や知識、そして今回形成したコミュニティーは今後の私の研究生活における財産になるだろう。

末筆とはなるが、本セミナーの企画運営にご尽力くださった先生方、FSC 事務局の千葉さまをはじめとする AA 研スタッフの皆さまに改めて感謝を申し上げたい。